きまじめで
やさしい
弱者のための
「独立・起業」
読本

合同会社うんすい宅建 代表
Koichi Abe 阿部浩一

クロスメディア・パブリッシング

プロローグ
「なぜ、今の仕事に就いたのですか？」……8

第1章
生きやすさは何をしたいかではなく、「どこで生きるか」で決まる

1-01 人々が理想とする弱者像と相対的弱者について……16
1-02 権利を主張するのはわがままか……20
1-03 「堅実」に生きられるのは強者だからこそ……24
1-04 おとなしそうでオドオドしている人だけがHSPじゃない……28
1-05 「働くということ」を捉え直してみる……31
1-06 仕事と趣味とライフワークのクロスオーバー的な生き方……34

1-07 正社員、怖い ……37
1-08 社会起業家の罠 ……40
1-09 「会社を離れる勇気がない」と言っているうちはまだ余裕 ……43
1-10 貧乏な人が今ある資源を用いて起業できる時代 ……47

第2章 独立・起業のテーマはありふれたものくらいがちょうどいい

2-01 やりたいことよりも絶対にやりたくないことから逆算する ……52
2-02 弱さの違いに合った独立・起業の方法とは ……56
2-03 業種はわかりやすく、中身で差別化する ……59
2-04 個人事業主と法人の違いについて ……63
2-05 独立・起業するのにお金はあんまりいらないけれど ……67

2-06 クラウドファンディングは楽しい……70
2-07 自分にとってフツーのことは案外売れる……74
2-08 熱気に包まれる狭い場所をつくろう……78
2-09 とりあえずやってみれば、準備すべきものや課題は見えてくる……82
2-10 広告宣伝は面白いけど奥が深い……86

第3章 自責から解放されることで、社会が見えてくる

3-01 「努力」に冷たい社会……92
3-02 業務委託契約とフリーランスに潜む危険性……95
3-03 自分は悪くない、社会のほうが悪い……99
3-04 この社会があるから幸せでいられる……103

3-05 寄付をすると幸せになれるって本当？……106
3-06 寄付をしたら税金が安くなる場合がある……110
3-07 LGBTsと遺言……114
3-08 コーディネート力の高い専門家を探そう……117
3-09 コミュ障でもいい、大切なのは「コラボする力」である……121
3-10 いちばんケンカが強いのは「めんどくさそうな人」である……125

第4章 弱者のための暇つぶしと時間稼ぎの方法

4-01 宅建士資格は人生一発逆転のパスポート……130
4-02 保護者を頼れない子どもたちと住まいの問題……133
4-03 明日死んでも50年後に死んでも、余生……137

4-04 LGBTsの10人に約3人が「住まい」の確保に困っている……141
4-05 生き方のロールモデルが少ないLGBTs……145
4-06 同性カップルのためのペア住宅ローンの広がり……149
4-07 株屋・不動産屋・保険屋はうさんくさい職業御三家!?……152
4-08 メディアリテラシーとポッドキャスト……155
4-09 Oh! RADIO……159
4-10 ネットの時代だからこそ紙媒体が効く……164

第5章 人生はお花畑ではなく荒れ地である

5-01 恩返しと恩送りの話……170
5-02 6時間だけ働いて本を読め……174

5-03 無理をする必要はないけれど、限界を決める必要もない……178
5-04 「脱落したら最後」――恐怖であやつられる私たち……182
5-05 今の自分にふさわしい人しか寄ってこない……186
5-06 引っ越し貧乏が教える部屋探しの極意とは……189
5-07 何がやりたいかよくわからない人に見えてもいい……193
5-08 自分のことが好きですか？……196
5-09 定休日とスキマ時間の話……200
5-10 荒れ地をお花畑だと思うから苦しい……204
エピローグ 居場所がないなら自分でつくるしかないという開き直りと諦念……208

プロローグ

「なぜ、今の仕事に就いたのですか？」

現在、何らかの職業に就いている方にうかがいます。なぜ、今の仕事に就いたのかと訊かれたとき、あなたは何と答えるでしょうか？　その答えの内容や答え方にはきっと、あなたの個性がにじみ出るだろうと思います。どういうシチュエーションで、誰に訊かれたかによっても、答えは変わるかもしれません。

２０２１年４月、私は業界未経験でありながら、ひとりで不動産会社を創業しました。どうして不動産屋さんになったかというと、以前から、宅地建物取引士の資格を持っていたからというのが、まず大きかったです。不動産業の中でも、宅地建物取引業を営むには、事業所あたり５人に１人の取引士を置かなければなりません。ですから、資格がないと誰か有資格者を雇わなければなりません。私は起業するなら「ひとりで」と考えていたので、資格がなければこの仕事を選ばなかっただろうし、そのためにこれから勉強して資格を取ろうとまでは考えなかったでしょう。

身もふたもないことを言えば、私にとって不動産業自体は、そこまでしてやりたい仕事ではない、やらなくてもいい仕事なのかもしれません。職業の分類というのは、目的ではなく、手段に過ぎません。

私がひとりでの起業にこだわるのは、組織で働くことが苦手だからです。だからといって、人が嫌いなわけではありません。むしろ、一個人の立場を守りつつ、いろいろな人とコラボレーションしながら、企画を立てたり、仕掛けたりといったことが大好きな人間です。

ところが、組織に近づいた途端、どんなに周りがいい人でも、萎縮しておかしくなってしまうのです。

＊　＊　＊

今から3年余り前、私は精神科の閉鎖病棟に入院していました。もともとちょっとしんどいことがあればすぐに心療内科を受診、医師の顔を見るだけで安心して、話を聞いてもらったら少し元気になるということをよくやっていましたが、このときばかりはそれまでとは全く違いました。

いつも死ぬことばかりを考えながら、激しい動悸に襲われるのです。何をどうしたらいいかわからず、「いのちの電話」に何度も何度も電話をかけるのですが、一向につながりません。同じように苦しんでいる人が、世の中にはたくさんいることを思いました。一度だけつながったのですが、ただ「つながった、つながった、つながりましたね」などと泣きながら呟いたことを覚えているだけで、何を話したかは全く記憶に残っていません。

16歳のときに父を亡くしました。自動車で堤から転落して溺死したのですが、自死だったのか事故だったのかがはっきりしない最期でした。ただ亡くなった後で、残されたものや周囲の証言などを聞くにつれて、自営業者だった父は経営や人間関係などからずいぶん苦しかったのではないかとうかがわれました。昔気質だった父は一切そういう素振りを私たち家族に見せることはありませんでした。

そんな父を反面教師として、つらいときはＳＯＳを発信しまくってやろうと思いました。私はうつ状態と動悸に襲われながら、必死に自分の状況を、面識のある人や身近な人とのつながりが中心の某ＳＮＳに投稿し続けました。案外、余裕があると思われるかもしれませんが、「死にたい」とかそういうシャレにならないことをうっかり書いてしまわないよう、そこは注

意しながらできるだけ客観的に書くということを心がけながら綴っていきました。見苦しいと思いながらも、そうして何とかバランスを保っていたのです。

なぜそうなったかというと原因は複合的なもので、どうしても自分中心で語らざるを得ず、特定の誰かを貶(おとし)めることにもなりかねないので詳細は省きますが、私が自分には合わない環境に身を置いていることに目をつむり、なおかつそこで成果を出そうと、勝手に熱くなっていたのがよくなかったのだと思っています。

＊　＊　＊

申し遅れましたが、私の自己紹介をさせてください。生まれ育った山口県で定時制高校を卒業。在学中はアルバイトをしながら学費を稼ぎました。保育士になりたくて進学した専門学校を中退後、地元の書店に約10年、非正規社員として勤務。その間にも掛け持ちで、保険代理店の経営や自動車部品の配送運転手、肉体労働など、さまざまな仕事を経験しました。

30歳のときに上京。ＮＧＯ団体の職員として8年間働き、その後はフリーランスのイベンター、社会福祉法人の職員、ＮＰＯ専門のコンサルティング事務所経営などを経て、現在に至っています。

また、15歳の頃から作詞、作曲や歌などをやっており、現在も「あべこう一」という名前で音楽活動を行っているミュージシャンでもあります。

＊　＊　＊

弊社は、『マイノリティにやさしい』はみんなにやさしい」を企業理念のひとつとして、性的マイノリティ（ＬＧＢＴｓ）をはじめとする住まいの確保に困難を要する人々の支えになり、応援することを打ち出しています。私自身がゲイの当事者ということもあって、ＬＧＢＴｓの住居問題があることも以前から知っており、ずっと気になっていたのです。

また、私はＮＰＯ業界が長いのですが、その中で一時、児童養護施設にかかわる仕事に携わったことがありました。児童養護施設はさまざまな事情から親権者と暮らすことができない子たちが生活する場所です。ところがそんな子どもたちも、18歳になれば原則として、施設を出なければなりません。

そうはいってもまだ経験値の少ない若者たちです。その上、虐待や育児放棄に遭ったような子たちは、社会へ出てもうまく人間関係を築くことができず、仕事も失い孤立してしまう例は少なくありません。

親を頼れる子なら、親元で再起をはかることも可能です。ですが、施設出身者はそうはいきません。自分が出た施設の先生方も今いる子たちのことで精一杯ですし、なじみの職員が退職してしまったりすれば、疎遠になってしまいがちです。そういう子たちが一時的に身を寄せる場として、不動産を寄付される方がいることを知り、寄付者と受益者をつなぐ仕事をしてみたいと考えました。

ＬＧＢＴｓは、無理解や差別が克服されない現状にあっては、反論もあり得るでしょうが、便宜上、「社会的弱者」なのかもしれません。ちなみに、私自身は、それだけをもって自分のことを社会的弱者だとは思っていません。

ただ、同調圧力や空気を読むことが重視される社会の中にあって、組織が苦手なゲイの私は、ただいるだけで生きづらさを味わいながら今日まで来た感覚があります。自分では総合的な意味において、れっきとした弱者を自認しています。ところが、私は昔からいつも楽しそうに見えて、見た目や雰囲気が「弱者っぽくない」らしく、周囲からそれを理解されにくく、ただのわがままな変人で片づけられてしまいがちでした。

そもそも、弱者とは誰で何なのか。本書では私のように**「弱者っぽくない弱者」を「きまじ**

めでやさしい弱者」と定義づけて、そのままでもできるだけ楽に生きていける解説書としました。

人の悩みの大半は仕事とお金、人間関係です。私自身がそんな「仲間」のみなさんにいちばんお勧めしたいのが、ひとりで小さく始めて、拡大路線は取らないように注意しながら、継続させる起業という生き方なので「独立・起業」と銘打っています。

しかしながら、実際に組織を離れ、自分で事業を興す意味での「起業」なのか、固定観念や自分に不都合な諸々からの精神的な「独立」なのかはあなた自身に委ねたいと思います。あくまでも、きまじめでやさしいあなたが、自由に生きていくためのガイドとして存在できればと考えています。

本書はどこから読んでもわかるよう工夫しているつもりです。興味の湧いたところから読んでいただいて、かまいません。

なお、性的マイノリティについては、ＬＧＢＴと表記するのが一般的です。しかしながら、ＬとＧとＢとＴだけあるのではなく、そのあり方は色のようにグラデーションであるという観点から、本書では固有名詞などを除いてＬＧＢＴｓで統一しています。